

## はじめに

キリスト教主義学校で保育者養成に関わってきました。保育者の仕事は子どものケアをする仕事で、そのためには子ども理解が不可欠な仕事です。しかし、大人となった保育者が、目の前のゼロ歳児や1,2歳児の乳幼児の保育の世話を適切にするためには、多くの困難な課題に直面させられます。そこで求められる一番基本的な保育者の姿勢は、自分も一人の子どもであると自覚して、自分の「内なる子ども」との絶えざる対話ではないかと思います。自分も一人の子どもにかえって、目の前の子どもから学ぶ姿勢が求められていると思います。理解することは英語で *understand* といいます。相手よりも下に立って寄り添う以外に本当の理解は成立しないのだと思います。保育者の基本は「子どもにかえれ」がモットーになるとおもいます。そして、過去の子ども期を振り返って、精神分析的自己吟味をしながら、宗教的な意味での天父の子となることが求められていると思います。

### 1 なぜ、「子どもの神学」なのか？

子どもは、人間の一生涯の始まりを意味しています。しかし、この子どもとしての始まりは、その人間の幼少期に限らず、成人期をも予表し、生涯全体を貫き、かつ最後の終わりの日まで影響を与え続ける本質的な何かを内含していると考えられます。誕生は存在の「始まり」を意味しており、何もない「無」に対する「すべて」の始まりを意味していると考える時、それは、超越的・神学的な問題につながります。

例えて言えば、何故、ヒットラーは、独裁者となり、暴君となって、世界戦争の引き金となったのでしょうか？その発端は、彼の出生の秘密に由来していることを、精神分析家アリス・ミラー女史は、明らかにしました。<sup>1</sup> 彼女は、幼児期に蒙った屈辱、虐待および心理的暴行がその子どもの全生涯に深刻な影響を与えることをヒットラーの例を挙げて立証しました。ヒットラーの父は私生児として生まれ、母親はヒットラーが胎児であった時に父親から虐待されながら、身ごもったことが記録されています。絶対的支配者であった父親の子どもとして、地獄の幼少期を過ごしたことが記されています。このようにヒットラーとは何者か？を解き明かすヒントが子どもの誕生において予見されうるということです。

彼女の説によると、幼児に暴力が加えられた場合、生き延びるために、自分に暴力が加えられることを正しいことだと肯定して屈服せざるをえず、その屈辱を隠蔽し、偽りの自己を形成するのだと言います。親になると、その偽りの自己のはけ口として、無抵抗な子供にしつけと称する暴力の正当化が行なわれ、その闇教育の連鎖から犯罪や反社会的行動が生まれると述べています。

精神分析家エリクソンは、『青年ルター』4章の「すべてか無か」という題目で、アドルフ・ヒットラーの青年時代を分析し、自分が何者でもない「無」の恐怖に震えつつ、独裁者

---

<sup>1</sup> A・ミラー『魂の殺人—親は子どもに何をしたか—』新曜社 1983, p191 以下

として「すべて」になろうとした人間であると分析しています。そして、神学とは、形而上学的な「すべて」を確立することによって、実存的な「無」に対処する最も体系的な試みである、と神学を定義しています。このような神学の定義に基づくことによって、近代人も神学を必要としていることが理解できると思います。彼は、この「すべて」か「無」の事例について次のようなエピソードを紹介し、説明を加えています。

5歳の少年が、大人たちの会話をじっと聞きながら、話が加わることができずに待っていた。やっと機会が与えられ、一言、口をはさんだ時だった。父親は、最後までしゃべらせておいてから不用意にもこう言った。「これは7年も前の話、おまえが生まれる前、まだお母さんのおなかの中にもいなかった頃のことだ。」するとこの少年の顔は突然うつろになり、一瞬おいてワッと泣き出したのである。<sup>2</sup>

彼はこのエピソードを次のように説明しています。この父親の言葉が深い衝撃であったことは間違いない。「まだおなかの中にもいなかった頃」という言葉は、単に混乱したのではなく、根本的な神秘の前に連れ出されてしまったのである。その瞬間、彼は宇宙の中で一人であった。それどころか、その宇宙すら奪い去られて、形而上学的不安の墓場に一人残されてしまったのである。「形而上学的不安」と呼んだのは、自らが存在しない (non-existence) 可能性に突然気づき、創造者（父親はかなり無礼な仕方で神の役を演じていた）に全面的に依存しているという事実に気づいて戦慄することである。こうした戦慄は、デカルトの言う「我思う、ゆえに我在り」の「我思う」が成立しない時であり、近代人をパニックに落とし込むのである。そこで、近代人は、自分がいかなる意味でも第一原因であるとの確信を持つことができないという疑念から、嫉妬心や競争心が現れ、人種的個人神話を造りだし、自民族主義や自己中心主義や全体主義へと行き着かざるを得ない。<sup>3</sup>と、このように述べています。このような近代人特有の問題を彼は、「実存的アイデンティティ (existential identity)」という言葉で表現し、「形而上学的・実存的な自我感覚」の問題として取り組んでいます。

「すべてか無」の課題は、「死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神」<sup>4</sup>への信仰と深く関係しています。神学においては、創世記1章の神の存在とカオスの問題です。近代人はこの同じ問題を一人の人間の自己成立基盤の実存的問題として「自我感覚」の心理学的課題として解き明かそうとしているのです。ですから、人間形成や教育の課題を考える時、最初のこどもに視点を当てて考えることには深い宗教的な意味が隠されていると思います。こどもを宗教的に神学的に考える理由がここにあります。

こどもの早い時期の教育の着手の効用について教育学の創始者コメニウスは次のように述べています。「天の下で人間の堕落を改善する有効な道は、年少者の正しい教育の他には

<sup>2</sup> E・H・エリクソン『青年ルター1』みすず書房2002, p170

<sup>3</sup> 同上, p172

<sup>4</sup> ローマの信徒への手紙4章17節

ない。幼児期はすべてが単純で、神の慈悲が与える治療を受け入れるのに適している。アダムの転落に由来する墮落が全人類に広がっているといえども、第二のアダムであるキリストが、命の木である自分に人類を新たに接木したのだから、不信仰ゆえに（子供時代はそんなことは起こらない）自らを締め出す人以外は誰も排除されない。ただ神の恵みを受け取ってそれを見守り、汚れのない身を世界から守ることを知ればよいのだ。こどもにはそれを他の誰よりも容易に教えることができる。悪い因習にまだ捕らわれていないからだ。」<sup>5</sup>

こどもの教育において、第二のアダムであるキリストがすでにかかわっていることは驚きですが、神の慈悲が与える治療を信じて、人間の墮落を改善する有効な救済策としてコメニウスは、子どもの胎児の時期から始めて、教育学体系を築き上げました。幼稚園の創設者フレーベルも、当時のドイツの社会変革を目指しつつも、理想の世界の実現には、幼児の教育こそ、最も効果的で着実な道であると信じて、世界最初の幼稚園創立者となりました。そして、大人に向かって、「さあ、こどもに生きようではないか。大人が失ったものをこどもから得ようではないか。こどもたちから学ぼうではないかと」と呼び掛けました。<sup>6</sup>

## 2 大人を変革させる「こどもの神学」

一昨年、李信建著『こどもの神学—神を「こども」として考える』という書物が出版されました。そのまえがきで著者は次のように述べています。「したがって本書は、単純にこどもたちを守り愛することを促す感情的な訴えではなく、大人の覚醒を促す応援と励ましの書といえる。大人たちよ、弱者を軽んじる加害者意識から抜け出しなさい。こうして、大人も、こどもを開放させることによって自らが解放の主体になるだけではなく、彼ら自身も眞の人間として生まれ変わって開放されることになるだろう。この時代に、こどもの開放と人間の開放という新しい生き方を、すなわち、自己変革と実践への新しいパラダイムを要求されていると同時に、それを形成していくことが大切になる。」<sup>7</sup>と。

ここには、こどもの教育に携わる大人は自分自身の自己変革なくしてこどもの教育は為しえないことが述べられています。こどもの教育に親や教師という大人が役目を与えられてきました。しかし、その実態は、大人が「闇教育」に加担して、教育の名による「虐待」を強いてきた歴史であったといえるようです。親が子供を教育するという、こどもの教育には、親の教育が義務付けられているために、闇教育の責任として、大人自身の変革が求められているのです。こどもの教育を考える時、教育者としての大人はまず、自己変革から出発しなければならないのです。エレン・ケイが主張した「こどもの世紀」はいまだ実現していません。こどもの教育を考える教育者自身の変革こそ、最初に来るべき課題であると考えられます。このように、こどもの教育には大人の意識を変革させる要因があるということです。

<sup>5</sup> J・A・コメニウス太田光一訳『大教授学』東信堂、2022,p17,18

<sup>6</sup> フレーベル『人間の教育（上）』岩波書店,1964、p 119

<sup>7</sup> 李信建著『こどもの神学—神を「こども」として考える』ヨベル、2023,p9,10

### 3 マリア・モンテッソーリのこども観

マリア・モンテッソーリも『幼児の秘密』という書で大人に向けて次のように厳しく批判しました。「ふつうはおとなは、こどもとの関係では、自己中心的（利己的ではなく）自己中心的であります。おとなはこどもの心を常に自分の物差しで判断します。これでますます無理解にならざにはすみません。この観察点から、こどもというものはからの器で、大人が何かで満たしてやるべきものだと思います。また、こどもは、大人が何でもしてやらねばならぬ、怠けた無能力者だと思います。結局こどもを仕上げるのは大人だと自負し、こどもの行いの善悪も、大人自身との関係で判断します。こうして大人はこどもの善悪の物差しになります。こうなると子どもは大人を手本にして矯正すべきで、こどもの中にある大人の性質と異なるものは皆欠点であり、大人は急いでそれを訂正する義務があると信じるようになることはまちがいなしです。おとなはそういうことをして、こどもの幸福のために、熱心に愛情と犠牲心とに満ちて世話をしているのだと信じます。しかし、実際は、大人はこれでもってこどもの人格を抹殺しているのです。」<sup>8</sup>

アリス・ミラーの「闇教育」と全く同じことを述べていることが分かります。さらに、彼女は、キリスト教信者として、大人のこどもへの根本的誤謬について、次のような神学的議論を述べています。「おとなは、自分をいわば幼児の創造的形成者、その精神的存在の設計者だと自負しました。おとなはほとんど神に近い力が自分にあると思い、進んで自分を幼児の神だと思い、創世記のあの文句『われは人をわが似姿によってつくろう』というのを、自分に当てはめることになりました。高慢は人間の最初の罪悪でした。神の代理をするというこの願望は、全人類を堕落させる結果になりました。」<sup>9</sup> このような大人の無理解と理不尽な支配に服するこどもの受難をキリストの受難と同一視して「こどもはキリストの受難の道を通らねばならないでしょう。」<sup>10</sup>と述べています。

自分を幼児の神とうぬぼれる大人や教師の性質は、原罪を背負った大人の習性として、簡単には修正が効かないために、解決策として現れた教育理論は、幼児の直接的教育は止めて、間接的教育に徹すべきであるという教育理論であったと思います。こどもの発見者といわれるルソーは、こどもを自然の法則に委ねる間接教育を主張しました。またフレーベルは、教育は命令的・規定的・干渉的であってはならず、受動的、追随的、保護的でなければならぬとして、消極的教育方法を主張しました。そのねらいは、すべてのものを貫く神的な本質が、幼児の中に働くことを妨げないためでした。<sup>11</sup> このような大人の間接教育の方法論を導きだした背景には、人間を内側から教育し成長させる創造者なる神への信頼と信仰が

---

<sup>8</sup> マリア・モンテッソーリ著『幼児の秘密』 国土社 1968, p23

<sup>9</sup> 同上、 p 46

<sup>10</sup> 同上、 p 251

<sup>11</sup> フレーベル『人間の教育（上）』 岩波書店, 1964, p 18

前提となっていたことに注目したいと思います。

モンテッソーリ女史の教育観にも創造主である神信仰が前提になっていることがわかります。彼女も大人の役目を消極的に捉えていますが、その根拠は、聖書が語る、創造主に似せて造られた人間觀に由来しています。彼女は、幼児の本当の真の姿を次のように表現しています。「こどもも働く者で生産する者です。大人の仕事に参加できなくても、それでも自分の全く固有の大きな重要な重い使命を果たさねばなりません。それは人間を形成する使命です。何にもしない、黙って動かない、意識を欠いている赤ん坊から、精神生活の獲得物で豊かになる知性と、精神の輝く光を備えた、できあがったおとなが生じたら、それはみな幼児のおかげなのです。それは全く幼児だけによって人間は造り上げられるのですから、大人はこの仕事に干渉することはできません。こどもの仕事は別の秩序に属し、大人の仕事とは違った威力を持っています。いや大人の仕事の正反対で、無意識の仕事で、それは発育中の精神的エネルギーによって実現されます。それは聖書の叙述を思い出させるような創造の作業です。聖書では、人間については、彼は造られたと言っているだけです。しかし、どうして造られたのか、どうして生きた天造物である人間は無から出てきたものであるのに、すべての天造物を支配する力と悟性という天分を受けたのでしょうか。こういう奇跡をわたしらは、こどもの個々の特徴の中に、すべてのこどもらにおいて、観察することができます。毎日私らはそれをそこに驚き眺めてよいのです。」<sup>12</sup>このように述べています。

こどもの精神生活には、創造者なる神からのプログラムが組み込まれていて、天体が目に見えない軌道を通るのと同じ正確さで、少しの変更もなしにやり遂げると述べています。そして、こどもは作業を倦むことなくし、作業で成長し、また作業がそのエネルギーを高めると述べています。神は天地創造の仕事をされました。キリストも「私の父は今もなお働いておられる。だから、私も働くのだ」<sup>13</sup>と言いました。人間のこどもも、神に倣って働くことが善なのであり喜びなのだと主張しています。

プロテstantの神学者は、アウグスチヌの遺伝的原罪説に振り回されて、こどもにも原罪説を適用して、こどもの矯正に奔走してきました。こどもは、神の神聖な被造物としての原型を留めているとは、考えてませんでした。神によって創造された人間性に罪の痕跡がどの程度浸透するのかは、諸説がある以上、断定的な判断は控えたほうが良いと思います。モンテッソーリはカトリック信者として原罪説を受け入れていたと思いますが、堕落後であっても人間性の創造的能力があることを認めました。彼女の理論は、科学者の目でものを言っている分、説得性があります。科学としての事実に照らしつつ、教義の真理性を見極める態度が、信仰者に求められていると感じさせられます。

#### 4 ヤヌス・コルチャクの教育者への提言

---

<sup>12</sup> 同上、p 225

<sup>13</sup> ヨハネによる福音書 5 章 17 節

ヤヌシュ・コルチャック（本名ヘンリイク・ゴールドシュミット）はユダヤ系ポーランド人で、1878年にワルシャワで生まれ、ワルシャワ大学で医師免許取得をした医者でしたが、同時に教育者として、ユダヤ人孤児院とポーランド人孤児院の運営し著作活動を通して活躍しました。ナチス・ドイツの迫害により、ユダヤ人孤児200名と共に自ら同行し、1942年トレブリンカ強制収容所でこどもたちと死を共にしました。1989年の国連子どもの権利条約の基礎となるこども観を後世に残した優れた教育者として彼の真価が再評価されています。

コルチャック先生は、子どもの立場からの人権を主張してきました。その影響力を無視することができません。子どもの人権宣言に影響を与えた彼の言葉を列挙してみます。

#### ヤヌシュ・コルチャックによる子どもの人権宣言

- ① こどもには愛を受ける権利があります。こどもには尊重される権利があります。
- ② こどもには最適な条件の下で成長発達する権利があります。
- ③ こどもには現在を生きる権利があります。
- ④ こどもには自分自身である権利があります。
- ⑤ こどもには誤りを犯す権利があります。
- ⑥ こどもにはあるがままの自分の真価を認められる権利があります。完全なこども像を追い求めるべきではありません。
- ⑦ こどもには秘密を持つ権利があります。
- ⑧ こどもには虚言・欺き・盗みから守られる権利があります。子どもの数少ないうそやごまかしや盗みを認めなければなりません。
- ⑨ こどもには教育を受ける権利があります。
- ⑩ こどもには不正に抗議する権利があります。
- ⑪ こどもはこども裁判所をもち、互いに裁き裁かれるべきです。子どもの行動や活動、思考、計画に判断を下しているのは我々大人だけです。私は、こども裁判所は必要不可欠と信じます。こどもには少年司法制度で弁護人から弁護される権利があります。
- ⑫ こどもには神と交わる権利があります。こどもには未成熟のまま神様のもとに召される権利があります。<sup>14</sup>

子どもの権利条約の生みの親であったヤヌス・コルチャックは、保育者や教育者になる人に向かって教育者的心構えについて次のように述べました。

「こどもを知る前に自分自身を知るように努めよ。あなた自身もひとりのこども。あなたが最初に教育しなければならないのは、そのこども、つまりあなた自身なのです。」<sup>15</sup>と。

---

<sup>14</sup> ヤヌシュ・コルチャック著 サンドラ・ジョウゼフ編 津崎哲雄訳『コルチャック先生のいのちの言葉—こどもを愛するあなたへ』明石書店 2001

<sup>15</sup> ヤヌシュ・コルチャック著『コルチャック先生のいのちの言葉』明石書店、2001,22 頁

子どもの教育者は、目の前のこども (child) を教育する前に教育者自身のこども (childhood・こども期) を教育する姿勢がなければならないと言っています。こども期の記憶は教育者の中に生きて働いています。ですから、目の前のこどもを教育する時、同時に教師自身の「こども期」と対話しながら、自分自身のこども期の軌道修正をも含みつつ、こどもと接すべきだというのです。大人自身が自己を変革させて、こどもに立ち返るべきであり、こどもから学ぶという新しいこども中心の教育方法論が、このコルチャック先生の発想からも導きだされると思います。

## 5 西洋近代教育思想の源流としてのイエスの「こども」観

教育とキリスト教との深い結合点に基づく教育理論は、西洋近代教育思想史における存在論的教育学の系譜に共通してみられる現象として一つの源流を形成していると考えています。コメニウスはそれを敬神・徳行・学識という言葉で表現しました<sup>16</sup>。ルソーはそれを「神が記した消すことのできない文字としての自然（良心）<sup>17</sup>」に基づく教育理論として展開しました。また、ペスタロッチは人間性を支える根本原理を「内的安らぎ」と表現しました。<sup>18</sup> フレーベルはそれを、母子間の共同感情（平安・微笑・快感）の発達に見出しました<sup>19</sup>。またアメリカのジョン・デューイは若いころ、キリスト教価値観に基づく教育理論を論じ、晩年には、A Common faith 「共通の信仰」を唱えることによって、宗教と教育の結合の普遍性を示唆しました<sup>20</sup>。エリクソンの発達理論を、人間形成を論じた教育理論と見做すことができるとすれば、彼の発達理論もまた教育と宗教の深い連携を語っていました<sup>21</sup>。これらの教育思想の共通点は、教育は人間の存在をかけた行為であり、その存在の諸関係は、人間を超えた神の超越的関係性を含むという点にあると考えています。そして、これらの教育思想系譜は、新約聖書が語る教育思想すなわちイエスの「子どもの神学」にまで遡ることができますのではないかと考えています。<sup>22</sup>

---

<sup>16</sup> コメニウス著、鈴木秀勇訳『大教授学1』、明治図書、1972年、63頁。

<sup>17</sup> ルソー著、今野一雄訳『エミール中』、岩波文庫、1963年、164頁。

<sup>18</sup> ペスタロッチ著、長田新訳『隠者の夕暮れ・シュタッツだより』、岩波文庫、1943年、12頁。

<sup>19</sup> フレーベル著、荒井武訳『人間の教育（上）』、岩波文庫、36-40頁。

<sup>20</sup> デューイ晩年75歳の作品“*A Common Faith*”は J. デューイ = G. H. ミードシリーズ11巻、河村望訳『自由と文化・共同の信仰』、人間の科学社、2002年に「共同の信仰」という題名で翻訳されている。栗田修訳『人類共通の信仰』晃洋書房、2011は解釈入りの名訳であり、一読を勧めたい。

<sup>21</sup> E. H. エリクソン著、小此木啓吾訳『自我同一性』、誠信書房、1973年、72頁。

<sup>22</sup> 吉岡良昌『キリスト教人格教育論一個人の尊厳を見つめてー』春風社、2014,p188～p195

## 6 神のこどもとなる

「こどもの神学」の真の創始者は、イエスキリストであることを聖書から考察したいと思います。昔は、家父長的な父親像が主流でした。ですから、聖書への読み込みとして、家父長的な権威ある父なる神という視点が強く押し出されてきました。しかし、現代になると、こどもの権利条約が批准されたりして、これまで軽視されてきたこどもの立場が尊重される時代となりました。こどもが主役という視点に立って、改めて聖書に問い合わせをしますと、聖書は、昔からこども中心の立場に立っていたことを再発見させられます。

例えばイザヤ書11章の世界の終末の完成を賛美する言葉として、次のように記されています。11章6節以下を引用したいと思います。「狼は子羊と共に宿り、豹は、子ヤギと共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さいこどもがそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛も等しく干し草を食らう。乳飲み子は、毒蛇の穴に戯れ、幼子は、蝮の巣に手をいれる。わたしの聖なる山においては、何物も害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる。」

ここに登場する人間は、大人ではなく、小さいこどもであり、乳飲み子であり、幼子なのです。クリスマスの礼拝において、私たちは、繰り返し、羊飼いに語られた次の天使の言葉を聞いて来ました。「恐れるな、私は、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなた方のために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなた方は、布にくるまって飼い葉おけの中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」(ルカによる福音書2章10～12節)

救い主、主メシアは、受肉して、乳飲み子として、この世に宿られたのです。布にくるまって飼い葉おけの中に寝ている乳飲み子、これが私たちに救いを与えて下さった全知全能の神様のこの世に於ける存在のしるしなのです。

ボンヘッファーという神学者もこう言いました。

「もし、イエス・キリストが神として叙述されねばならないとすれば、それは、神的本質や神の全能さや全知についてではなく、罪の許にある弱い人間、彼の飼い葉桶と十字架についてでなければならない。飼い葉おけの中の嬰児は全き神である。」<sup>23</sup>と。

聖書啓示によれば、神は人間の「こども」の姿として、この世に現われたという事になります。神をこどもと見做すことさえできるのだと思います。

イエスが天父のまことの子として、公生涯を始めた時の、イエスの洗礼の場面がとても印象的です。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者という声が、天から聞こえた。」

(ルカによる福音書3章22節)。イエスはこの天父の声を聴き続けて、愛する父の心にかなう子となる一心で救済事業を全うしたのです。また、ルカ福音書18章15～17節には次のような言葉が記されています。「イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子まで

---

<sup>23</sup> D・ボンヘッファー『キリスト論』新教出版社、1966,p247

連れてきた。弟子たちはこれを見て叱った。しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。『こどもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国は、このような者たちのものである。はっきり言っておく。こどものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。』

自分は成人した大人であると自覚していても、人は皆、神の前には、心を入れ替えてこどものようにならなければならないというのです。さらに、ルカ福音書10：21には、主イエス・キリストが、天の父なる神に向かって、祈る言葉が次のように記されています。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのこととを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のようなものにお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適う事でした。すべてのことは、父から私に任せられておられます。」このように記されています。父なる神は、そのすべてを幼子のような主イエスキリストに託されたのです。知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者に、すべてを託されたのです。そして、このような方法こそ、天地の主なる父なる神の御心なのだと言っているわけです。

この世的には、こどもは弱者として、軽蔑の対象になっています。早く成人となって一人前になるというのがこの世の考え方です。こどもよりも成人の方が、価値があると考えられてきました。女よりも男、弱い者よりも強い者、力のない者よりも権力を持つ者が、優れているというのが、この世の価値基準です。しかし、神から見た価値基準は、全くの正反対なのです。神の前に誇る所から人類の墮落は始まりました。人間は神のようになることはできません。しかし、イエスのように、神のこどもとなることができるのです。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者」という声を聴いて、神のこどもとなることができるのです。

## 7 今後の学校教育の課題

キリスト教の人間観によれば、非連続としての人間の危機や挫折は、神の恩恵によって乗り越えられるべきものとして想定されています。キリスト教の影響が強いヨーロッパの教育学には、この愛を人間形成の土台にする教育者が多いのです。コメニウス、ルソー、ペスタロッチー、フレーベルらはその典型です。彼らの教育学に共通しているのはこのキリスト教の神理解であり、その神理解の上に人間の教育理論が樹立されているのです。

ですから彼らは、学校教育の営みをただ「teaching・知識を教える」だけに限定せずに、そこに「caring・いたわりつつ世話をすること」営み、及び「healing・癒し、癒される人間関係」を含ませていたと考えられます。近代の学校教育が「知識」を教える teaching から出発させて、残りの営みを分離させてしまったことは近代教育の最大の誤りでした。これまでの人類の長い教育の歴史においては、ケアリングやヒーリングとともにティーチングがなされてきました。ケアリングの教育、ヒーリングの教育は日常的風景であったのではないでしょうか。しかし、宗教施設と家庭と学校が近代学校制度以来分離されてしまいました。しかも、現代においてはますます学校教育の占める比重が大きくなっています。それに反して家庭

教育と宗教教育は片隅に追いやられてしまいました。しかし、現代のように、学校生活が子どもの生活のほとんどを支配する時代になったからこそ、家庭教育の機能や宗教施設の機能を学校教育が担う必要がでてくるのは当然であると考えられます。現代では、学校に保健室が必要であり、カウンセリングルームが必要であり、ケアリングの教育、ヒーリングの教育が必要なのです。現代の学校再生の鍵は、どのようにしたらこの家庭教育の機能と宗教教育の機能を学校教育の中に取り入れられるかに掛かっていると思います。

多くの学校は現在、癒しよりも「傷つけられる」関係が多い中、ケアリング中心の学校教育を提言したネル・ノディングズ（スタンフォード大学教授）の提言を紹介したいと思います。彼女は、その著『学校におけるケアの挑戦』<sup>24</sup>において、学校の教科主義（リベラル・アーツ=教養主義の伝統）を批判し、その替りにケアリングを中心とする6領域の主題でカリキュラムを再構成することを提案しています。ヨーロッパのエリート主義教養主義は現代のすべての人々の生活やモラルとかけ離れているとして、誰でも生きるうえで必要なケアリングの知識と倫理を教育内容にすべきであると提言したのです。それは、「自己のケア」から始まり「親しい者のケア」「見知らぬ人や遠い他者のケア」「動物・植物・地球のケア」「人工世界（道具と技術）のケア」「アイデア（芸術と学問）のケア」という6領域のカリキュラムを提案しています。

「自己のケア」とは自分自身という存在を大切にする営みです。自分の身体を育て健康を守ることをはじめとして人の誕生と死の意味を知り、宗教生活と職業生活、余暇の過ごし方を学ぶ領域です。

「親しい者のケア」は、恋人・夫婦・親子・友人・同僚・近隣の関係において、人々をいくくしみ養育し世話をする知識と技術と倫理を学び、親密な人間関係でもって大きな社会を構成する課題を担う教育の領域です。

「見知らぬ人や遠い他者のケア」は、人種・階級・ジェンダーによる人々の生活と意識の違いや世界の多様な国々の文化や社会について学び、異質な人々が相互にケアし共存する生き方を学ぶ領域です。

「動物・植物・地球のケア」は学校で生きものの世話をし、植物を育てる作業から出発して、身のまわりの自然を守り、地球を環境破壊から救う方法を学ぶ領域です。

「人工世界（道具と技術）のケア」は、人間の考案した道具や技術や機械を大切に使用し、その修繕や保管の方法を学ぶ領域です。「アイデア（芸術と学問）のケア」は、数学・科学・歴史・文学・美学・倫理学などの文化を尊び育むことを学ぶ領域です。ノディングズはこの6つの領域を核とするケアリング教育を構想し、その教育方法を「モデリング」「対話」「実践」「信念の表明」という4つの方法で提起しています。「モデリング」とは、教師自身がケアする主体のモデルとなること、「対話」は「ケアリング」の主題を話しあうこと、「実

---

<sup>24</sup> ネル・ノディングズ著佐藤学監訳『学校におけるケアの挑戦—もう一つの教育を求めて』ゆみる出版、2007

践」は「ケアリング」の実践を遂行すること、「信念の表明」はケアの倫理を多数の前で態度表明することとしています。

このようなケアリングを中心とする教育内容の転換は、生産と消費と支配と競争を原理とする現代社会への挑戦として重要な問題提起をしていると考えられます。社会変革を視野に入れた学校改革として注目されています。ケアされる者の意識には受容、承認、応答があります。またケアする者に求められている意識も、自らの魂の中身を空にして、他者の存在をあるがままに認め受け入れる受容の態度が必要です。この意識は、子どもの存在意識につながる大切な普遍的な人間の特性といえると思います。前近代的な子どものケアが学びと結びついていたことの復権ともいえると思います。

#### むすび

子どもの教育を考える大人がまずなすべきことは、自分の内なる「子ども」との絶えざる対話をしながら、目の前の「子ども」から学ぶ姿勢を持ち続け、ひいては、自分も天父によって愛されている、かけがいのない一人の神の子となることであると思います。子どもには神の恩恵が純粋にとどまっており、大人はこの子どもが持つ神からの恩恵を享受しつつ、子どもとともに学ぶ存在であると思います。教育においては、子どもが主人公であり、大人は子どもの奉仕者に徹すべきではないかと考えています。大家族制度のときは、祖父母が主役でした。近代は、父母が主役でした。しかし、現代は子どもが主役となりつつあります。子ども中心の子どもの世紀へと大人は橋渡しをしなければならない時代になったのだと思います。大人と子どもが相互にケアしケアされるケアリング社会の出現が期待されていると思います。

---

## ○一人称・二人称・三人称による人格形成の課題

### 一民主主義社会を成立させる個人の人格的尊厳の確立のために一

「一人称のわたし」は二人称の「あなた」による深い愛情と信頼から成立します。

二人称の「あなた」は親子関係の父親・母親の愛から始まり、イエスの自己意識である

「あなたは私の愛する子、わたしの心に適うもの」と語りかける、創造者である生きた人格神である「あなた」に出会う経験まで深化するように促されています。生ける人格的な神の子となる「あなたとわたし」の関係によって「わたし」の人格的尊厳としてのアイデンティティは完成すると思います。

一人称のこの「わたし」のアイデンティティ形成は、神さまがご自分のことを I am who I am 「わたしはある」と定義された神様ご自身の一人称的「わたし」の人格と深く結びついています。この究極の「あなた」と「わたし」との深い信頼関係を築くことによって「わたし」の一人称的人格形成は確立され、そして、ここから自由・平等・人権が保障され、三人称的な法の支配に服する社会である民主主義社会が成立し、ひいては神の国形成に寄与する社会になると思います。こうして、神と世界と隣人への責任意識を持つ平民としての一個人が確立されると思います。そのモデルはイエスキリストです。人格神であり眞の人となられたイエス・キリストが、時満ちてこの世に現れ「神われらと共にいます」世界を実現させてくださいました。ですから、現代人は孤独な「単独者」ではなく、「神われらと共にいます」という神の共通的恩恵に預かる「共同者」であると思います。この「あなたとわたし」の深い人格的交わりから湧き上がる喜びと感謝をもって自由で平等な社会形成に寄与していきたいと思います。